

NIKKEN SEKKEI
Quarterly

2007/Spring

目次

watching	02	大阪弁護士会館
	03	市民に開かれた弁護士会 中務嗣治郎
	04	弁護士と建築家の協働 松葉一清
	06	理念を形にする 江副敏史
perspectives	08	都市の緑環境とヒートアイランド 山村真司
都市経営フォーラム	11	第225回 蘇るか。いきいきとした農村景観 楠本侑司
topics.....	12	受賞から 出展から
works	14	竣工しました 対馬市交流センター 東京女子医科大学付属 八千代医療センター 新菱冷熱工業株式会社 耕風寮 京都リサーチパーク8号館
日建設計グループニュース.....	18	日建ハウジングシステム
	19	北海道日建設計

表紙 大阪弁護士会館

NIKKEN SEKKEI
Quarterly

2007
Spring

発行: 株式会社 **日建設計**

東京都千代田区飯田橋2-18-3 〒102-8117

広報室 Tel: 03-6478-8334

Fax: 03-5226-3044

URL: <http://www.nikken.co.jp>

制作: 森本常美(株式会社 オーム)

協力: 石堂 威(都市建築編集研究所)

印刷: 日本平版印刷株式会社

撮影: 大阪弁護士会館=東出清彦/石堂 威

篠沢 裕 SS九州 西出貴文

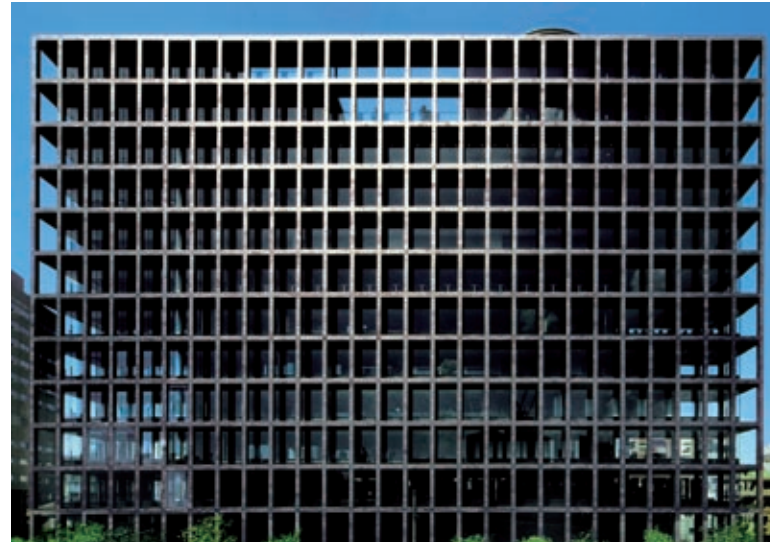
村井 修 河合止揚 (順不同)



watching

大阪弁護士会館

建築主 大阪弁護士会
所在地 大阪市北区
敷地面積 5,078.06m²
延べ面積 17,037.21m²
構造 鉄骨造
階数 地下2階、地上14階
竣工 2006年9月



watching

大阪弁護士会館

市民に開かれた弁護士会

中務嗣治郎 (なかつかさ つくじろう)

大阪弁護士会 新会館建設特別委員会 委員長



大阪弁護士会が旧検察庁跡地を購入して新会館を建設することを決議したのは、2001年10月の臨時総会であった。様々な意見があったが、ようやく会員の総意が決まったのである。予定地は中之島地区に残された5,078.06m²の申し分のない地形の土地であった。予定地の購入が実を結び、新会館建設特別委員会を中心に、英知を結集した建設作業が始まった。

新会館のコンセプトは、協議を重ねた結果、市民に開かれた弁護士会と司法の一翼を担う弁護士会のシンボル性、容量を確保し機能性に優れた将来のニーズに対応できるフレキシビリティ、そして、中之島の水と緑の都市景観と環境にマッチする調和性の3点に集約された。

このようなコンセプトを設計のなかに取り入れ、かたち具現化してもらえる建築家を選定することが最重要課題となった。プロポーザル方式により設計会社を

選定することになったが、弁護士会にふさわしい透明性と公平・公正な手続を経て、日建設計に設計業務を委託することになった。それが目をみはる新会館誕生の礎になったのである。

設計担当江副敏敏氏を中心とする設計集団は、弁護士会のコンセプトを充分に具現してくれた。吹き抜けの広いエントランスホールは市民ホールのように市民の参集を予定したスペースである。そして、地下1階、1階、2階の低層階はすべて

市民サービスのフロアとして提供している。まさに、市民に開かれた弁護士会のコンセプトがかたちになったものである。容量を確保し、将来のニーズに対応できるフレキシビリティは、サイドコアを取り入れフロアを自由にレイアウトできるようにする基本的な構造から、将来の容積を拡充できるようにするための13階、14階の吹き抜け部分の設置など、きめ細かく織り込まれている。そして、ガラス、コンクリート、レンガとタイルという素朴な素材からなる建物は従来の弁護士会のイメージを一新し、緑に囲まれた新会館の一画は、中之島の新しい名所となった感がある。これからは新会館をベースにこのコンセプトにふさわしい弁護士会の新たな活動が始まる。

厳しい予算のなかで、われわれの期待通りに、誠実に建物を完成してくれた施工者の大林組と共に日建設計の関係各位に感謝してやまない。

弁護士と建築家の協働

松葉一清

建築評論家 朝日新聞編集委員

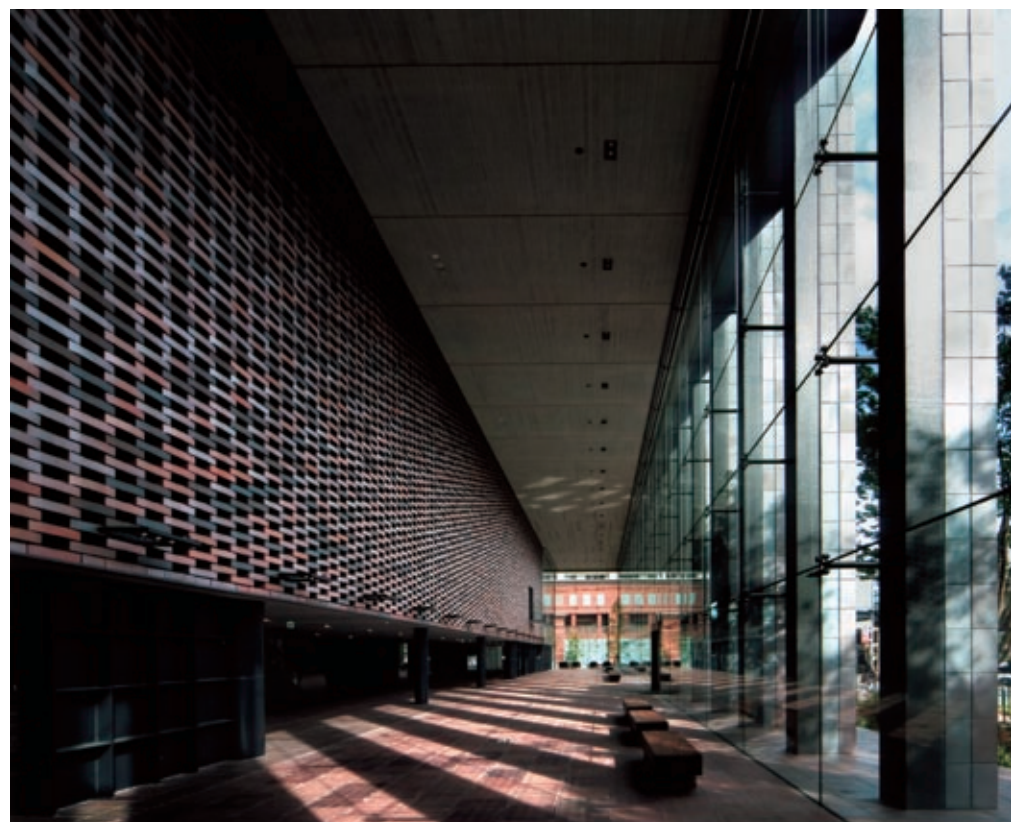
都市のあらゆる建築が証券化されたり、PFIという名の公的な負債化したりしている時代、「会館建築」は独立性だけでも希少な存在となっている。職業を同じくするひとびとの集まりや学校の同窓生らが、会館建築のオーナーであり、それゆえ、建築そのものが経済性や商業性のみで測られずにすむ。そうした存在前提は、都市における建築の公共性を確保する貴重な手だてとして尊重されてしかるべきだろう。

遠目には細身の洗練されたオフィスビルのひとつに見える「大阪弁護士会館」の2階に配されたホールロビーに足を踏み入れたとき、わたしはそのことを強く思った。オフィスビルなら控えめなアトリウムが下層階に配されているだけのはずなのに、そこには1960年代に日本のモダニストたちが商業主義とは明確な一線を画し、実現しようとしていた品位ある空間が展開していたからである。

やや薄暗く、決して誰にも媚びない空間の仕立ては、弁護士という職業のしっかりとした倫理観を体現しており、実に好ましい印象を抱かせる。微妙な光沢を帯びた炝器質のレンガがもたらすほの暗い重厚さと、一段置きに空隙が出来るように積まれたレンガのスクリーンからさし込む強い光のアンサンブルが、空間に品位を持たせている。

集会などの開かれるホールのエントランスという不特定多数のひとびとが使う場でありながら、光源はレンガのスクリーンで絞り込まれた自然光に多くを負っている。明るさは退けられ、空間は自然光がもたらす陰影に支配されている。その限定された光のなかで、炝器質のレンガの肌は繊細な反射光を利用者の視覚にもたらし、見事なまでの暗がり演出している。

この明暗のみを演出の手段としている空間のありかたこそ、先に触れたモダニス



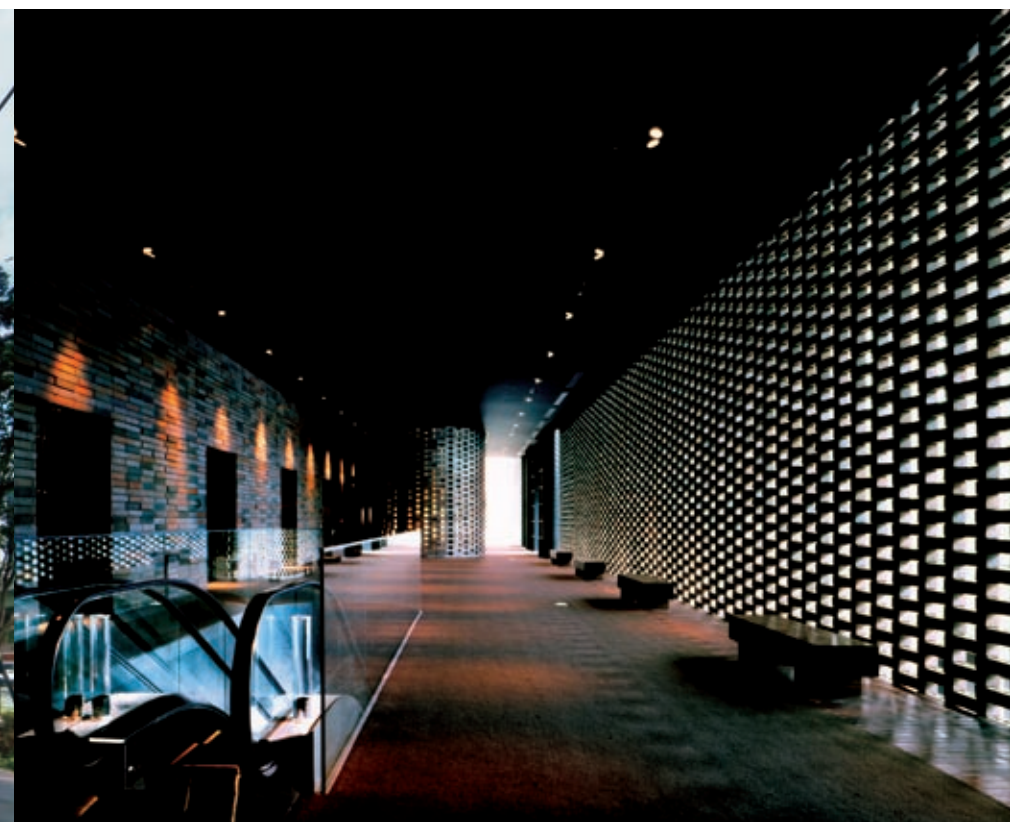
トたちが表現の手を縛り、抽象にとどまりながら劇的な演出を試みた禁欲の表現の系譜を継承するものである。

そこに立つと、オーギュスト・ペレの「ランシーの教会堂」(1923年)を連想した。モダニズムの先駆けとなった大建築家が構想した宗教的な空間が、それぞれ都市の建築という建築がこぞって証券化されてしまう現代日本において出現したのである。しかも、それは単なる模倣の域にはとどまらず、間口の長い直方体の空間の形をとる高い抽象性のなかで実現された。持参のワイドアングルのデジタルカメラを手に、その光と影の綾なす空間を捕獲しようとするうちに、わたしは少なからぬ興奮を覚えたほどだ。

こうした空間の出現は祝福されてよい。なにより、「大阪弁護士会館」の立地する場所は中之島である。弁護士会館の上階のロビーにあがると、南に広がる視

界には、日建設計の礎となった、住友本店臨時建築部による「大阪府立中之島図書館」(1904年)もあれば、80年代の日建設計・大阪の代表作のひとつ「大阪市立東洋陶磁美術館」(1982年)も望める。先人たちが公共性を尊重しながら営々と築き上げてきた都市の資産が、そのように中之島には累積している。また、隣地は高等裁判所、地方裁判所の合同庁舎である。弁護士という高い倫理性を求められるプロフェッションの集団による新たな建築には、中之島のそうした歴史を継承する意思表示が求められたはずだ。そして、その期待に違わぬだけの空間がもたらされたのである。

次にうちから外へと視界を広げていこう。2階のホールロビーの炝器質の壁は、実は1、2階吹き抜けになったエントランスのアトリウムに張り出している。このアトリウムの外壁側はビルの間口70メー



トルのほぼ全面がガラスになっている。つまり、街路側からこのアトリウムに入ると片側はガラス壁であり、その反対側の2階部分に炝器質のレンガ壁が宙づりになっているわけだ。

長さ70メートルとひとくちにいって、生半可なスケールではない。個人的な体験でいうと近代以降の建築でそれだけの水平方向のスケールを実現した建築は、世界でもそうは存在しない。恐らく、あのエストベリの「ストックホルム市庁舎」(1923年)ぐらいだろう。決して、大ぶりとはいえないこの中層ビルがその敷地内のフットプリントいっぱいこうした空間を設けたことは、やはり、会館建築が経済的効率よりも公共性を優位に位置づけている存在である効用にほかならない。

外観のスレンダーな美しさも称賛に値しよう。どことなく重苦しさの残るかつての日建設計・大阪の作品群とは異なる、

切れ味を感じさせる立体が、さっそうとそびえ立っている。スリムに見える外観は、内なるガラス張りのオフィス空間を一段外側で囲っている格子によるところが大きい。

その格子の外装も主役は炝器質の陶板タイル。このタイルは、わたしが最初に遠望したときには、シルバーの輝きのなかに赤みが消え去り、スリムな印象とあいまって金属の外装と見誤ったほどだ。そのような自然素材ならではの多彩な表情が季節や時刻の移ろいのなかで、中之島の風景に新たな彩りを添えている。戦前の公共建築群との比較はともかく、戦後の村野藤吾らによるオフィスビルと比べても、決して見劣りのしない水準が達成されている。

ところで炝器質のタイルは、直接的には前川國男の打ち込みタイルを連想させる。あるいは、佐藤武夫の一連の公共施設の外装も思い起こさせる。いずれもモ

まつば かずきよ
1953年 神戸市生まれ
1976年 京都大学建築学科卒
1976年 朝日新聞入社
建築におけるポスト・モダンを巡る評論活動を展開するほか、都市全般、消費社会、演劇、サイバースペースに至るまで幅広く言及。
「近代都市と芸術展」(東京都現代美術館・ボンビドーセンター共催)をはじめ、展覧会の監修も手がける。

ダニズム初期の北欧のデザインを源流とする表現である。弁護士会館はそれへの単なる回帰ではなく、新たな美学の確立に意欲的だ。前川の東京・馬場先門の「東京海上ビル」(1974年)と比べれば、外装の厚ぼったさが先人とは違って見事に解消されていることがわかるだろう。それだけの清新さにあふれている。

それらのいずれもが建築家と弁護士という二つのプロフェッションの見事なコラボレーションのうえに成立したことは興味深い。設計の江副敏史は、弁護士たちとの設計プロセスにおける議論を「大変だったが、こちらの論理に真剣に耳を傾けてもらった」とも振り返る。いずれもが営利よりも社会的な責務の全を尊重する職業であり、そうであるからこそ市民の間で信頼と声望を確立してきたという自負を抱いている。

そうした職種への、相談者としての市民の来訪を歓迎するためにも、1、2階のスペースには開放感と品位が求められたのであり、それは職業者の集団としての弁護士会の矜持するところを象徴している。この空間は、弁護士会からの市民への贈り物であり、それに関与したことを建築家もまたよく理解しながら設計にあたり、この建築がもたらされた。両者の冷静な議論が、表現の熱情を一段と後押しして、ここにひとつの作品が結実したといえよう。

嵐のように吹き荒れるポピュリズムの波のなかで、二つのプロフェッションがしっかりと踏ん張った手応えのある地平の上に、この秀作が成立したことを祝福したい。あるいは不動産の証券化という抗いがたい流れのなかで、都市の公性を誰が担うのか、そのとき建築家はなにをなすべきかという重い課題へのひとつの有効な解答をそこに見た気にもなり、勇気づけられたのである。

理念を形にする

設計 江副敏史

このプロジェクトは、2002年に16社が参加した設計プロポーザルが行われ、第1次、第2次審査の後、2度のヒアリングを経て私たちが設計者に選定されました。敷地はちょうど堂島川が緩やかに蛇行しているため中之島を見渡すには大変よい立地で、大阪市役所前御堂筋の大江橋からもよく見えるところです。また中之島は広い水面と深い緑で市民によく親しまれているだけでなく、日建設計にとって作品第1号の大阪府立中之島図書館をはじめ、多くの優れた建築が立ち並び重要な場所であることから、この仕事は絶対に当選したいと考えました。

設計に入ってから、クライアントの要望を設計に反映していく方法としてワークショップ方式を提案して、基本設計から実施設計が終わるまでの10ヵ月間、弁護士会の建設委員会の方々と2週間に一度のワークショップを続けました。その中で建物のコンセプトとしては、この水都・大

阪を代表する景観と調和。そしてその景観を最大限に受け入れて自然の光を建物の隅々にまで取り入れる、静かで訪れる人に心地よい建物でありたい。そして弁護士会のシンボルとして、活動の透明性、市民への開放性、組織の永続性、また環境配慮という弁護士会の理念を建物全体で表現できればと考えたのです。

この建物の外観の特徴はガラスボックスを覆う構造体である柱と梁の格子表現でしょう。柱と梁は450mm×450mmの細く繊細なものです。この格子状のフレームは構造ではないと思っている人も多いようです。通常ではフレームは化粧で内側に実際の構造柱が立っていることが多いからです。外周の柱と梁の大きさを450mmにそろえるため鉄骨柱を300φ、梁成を250mmに抑えた構造としています。また1.4mのハーフPCの庇は日射遮蔽の効果を高めるため室内天井と下面をそろえました。庇のレベルがフ

ロア面より下がるため、下方への眺望が大きく開けています。フレームは2,700mmスパンで構成されていますが、これは小会議室のモジュールからきています。幅900mmのテーブルを置き、向かい合って座するには2,700mmの幅がちょうどよい。オフィスのモジュールは通常3,200あるいは3,600mmですが、ここではそれは少し大きすぎるのです。1階にも一般の方が弁護士さんと対面して相談するブースが並んでいますが、それも2,700mmの幅です。無駄なスペースをつくらないためにモジュールをきちんと決め、形も単純にすることに努めました。

外装は、高層部格子の大型陶板と低層部外壁のレンガそしてガラスで構成されています。時を経るにつれて深みを増す焼き物の陶板とレンガをシンプルに使用することで、素材感を際立たせ、弁護士会の永続性を表現したいと考えました。柱梁を覆う幅450mm×高さ450mm×奥行き

225mmのコの字の大型陶板は製作がたいへん難しかったのですが、通常の平板パネルでは得られない強さが得られたと思っています。窯変の美しい還元焼成陶板の暖かな色合いは、旧大阪弁護士会館や、大阪高等裁判所、東洋陶磁美術館などの周辺建物ともよく調和します。低層部のレンガも幅440mm×高さ85mm×奥行き75mmの大型特注サイズとしました。中央で10mm、20mm、30mmの3種類のむくりをつけたものとフラットなもの4種類の微妙に異なるレンガで構成し、さらにひとつひとつ出入りをつけて積み上げることで通常のレンガでは得られない深い陰影を備えることができました。

新会館は弁護士会の機能を効率的に満たしながらも、市民への開放性と将来の組織の変化に対応できるフレキシビリティが求められました。構造柱は基本的に外部外周部のみとし耐震要素を集約することで、内部はフレキシビリティに富んだ

えぞえ さとし
設計室長

無柱大空間となっています。廊下の位置を自由に設定できるため、さまざまな奥行き

の会議室をすべて外部に面して確保することができました。「開かれた弁護士会」とするために1階は公共性を重視しました。東、西、南の3カ所に入口を設けて市民の広場として入りやすい空間としました。この空間の特徴はなんとといっても、エントランスと2階大会議室ホワイエを隔てている、高さ8.2m長さ46mの透かしレンガスクリーンでしょう。レンガは低層部の外壁と同じく、異なるむくりを設けたものを5,700個使用しています。1階ロビー側からは遮蔽効果、2階ホワイエ側からは採光効果を与えて、それぞれ異なった表情を醸し出しています。

13、14階の会員ロビーは、最上階というメリットを最大限に生かすことを考えました。屋上テラスを設けることで訪れる人が最上階であることを意識しながら、外部空間と内部空間と周囲の風景が重層して見

える面白さが感じられると思います。また14階の特別会議室は3方向に大阪の風景が広がるものになっています。

構造は、基本的に構造体がもつ力強さを表現するためにあえて隠さず、1、2階ではスチールの耐震壁も露出させています。今回の構造計画の特徴である「地下1階集中型制振構造」を日本で初めて採用することで、地震に対する安全性の向上だけでなく既存の検察庁地下躯体への負担を軽減することができました。既存地下躯体は新会館に再利用することで地下解体を少なくし、単に工期やコスト面だけでなく環境面にも貢献した計画としています。

設計で常に心がけているのは、平面も、立面も、構成はできるだけシンプルにすることです。全体をシンプルにまとめることで初めて素材感とかディテールに気を配ることができます。またそこからその素材感とディテールが生きてくると日々考えています。（聞き手：石堂 威）



都市の緑環境とヒートアイランド



日建設計総合研究所主任研究員
山村真司
(やまむら しんじ)

見過ごせないヒートアイランドの問題

日本の大都市の気温はここ数十年の間に大幅に上昇し続けています。ニューヨークでは過去100年で約1.6°Cの気温上昇にとどまっているのに対して、東京では過去100年で約2.0~3.0°Cも上昇し、特にここ10年ほどでも1.0°C上昇しています。東京は世界の中でもヒートアイランド化が顕著な都市ということです。このような傾向は、大阪、名古屋など国内の大都市でも見てとれます。地球全体の温暖化に比べてもヒートアイランド現象の進行は顕著となっているのです。

ヒートアイランドが及ぼす影響とは？

では、都市のヒートアイランド現象が進むとどのような影響が出るのでしょうか。気温の高温化による、健康への影響、建物エネルギー消費量の増大、集中豪雨の増加、光化学オキシダ

トの生成など、様々な悪影響を及ぼし、またこれら影響は相互作用によって増幅していく傾向があります。特に、熱中症の増加(図1)については老人や子供など体力面での弱者のみの問題ではなくなりつつあります。また、熱帯夜の増加(図2)は睡眠不足など健康への影響とともに、エアコンの使用に伴うエネルギー消費量の増加→夜間の人工排熱の増加→日中の高温化をさらに助長、と連鎖が増すばかりです。また冬の気温上昇は、「暖かく過ごせてよいのでは」と思われがちですが、冬の気温が上がるということは1年を通じて平均気温が上昇することであり、夏はいっそう暑くなることを意味しています。さらに冬の気温上昇は、蚊の越冬を容易にしたり、これまで国内では見られなかった生物の繁殖を助長し生態系に大きな影響を与えてしまいます。

最近では、東京都市圏でのヒートアイランド

現象が北関東にも影響を及ぼし、さらなる気温上昇の原因ともなっており、大都市だけの問題でも無くなっています。

なぜ都市は暑くなり続けるのか？

いったいなぜ、都市は暑くなり続けるのでしょうか。その原因として、緑が減少し舗装面・建物など熱容量の大きな材料の面積が増えたこと、建物排熱、自動車など人工排熱が増えたことが主要な2つの原因として挙げられます。

例えば横浜市では、過去数十年で緑地面積は1/3以下となっています(図3)。また東京23区内でも都心部の緑地率は、東京都の平均緑地率(約18%)を大幅に下回っています。一方、人工排熱については、東京都心部の場合、降り注ぐ太陽エネルギーの約20%にも相当する人工排熱を建物から排出しています。表面温度が上昇し、排出された熱気は滞留してますます

「熱の島」が広がることになるのです。

どうやってヒートアイランドを緩和できる建築・街づくりができるのか？

近年のヒートアイランドに対する様々な実測・調査結果の蓄積やコンピュータによるシミュレーション技術の進歩によって、どのように計画すればどのくらいヒートアイランド抑制効果があるのかやそれによる省エネルギー効果がわかってきました。

緑は優れた熱環境調整材料

図4は、表参道のケヤキによる街路樹空間と別の商業地区の夏(昼間)の表面温度分布を示したものです。表参道の街路樹空間はそれ自身が景観的に高い資産価値を有していますが、街路樹空間全体で15°C以上も表面温度の低減化に貢献しており、熱環境的にも優れた空間とな

図1 高温による救急搬送者人数(東京消防庁)

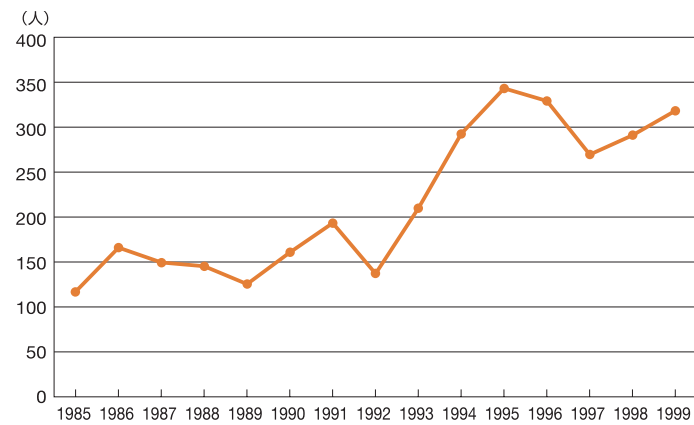


図2 熱帯夜日数の推移(東京都環境局)

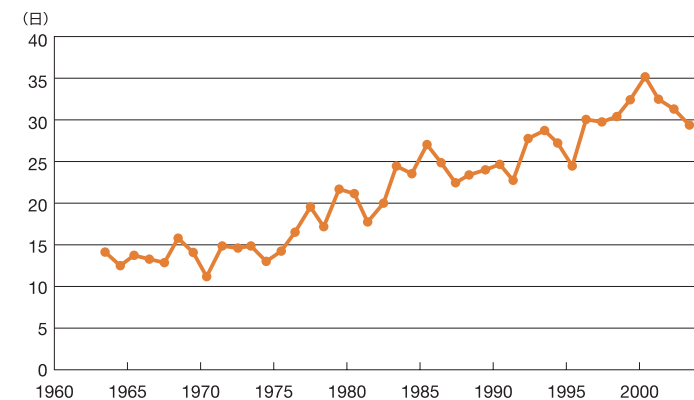


図3 横浜の緑地面積の推移(横浜市緑基本計画より)

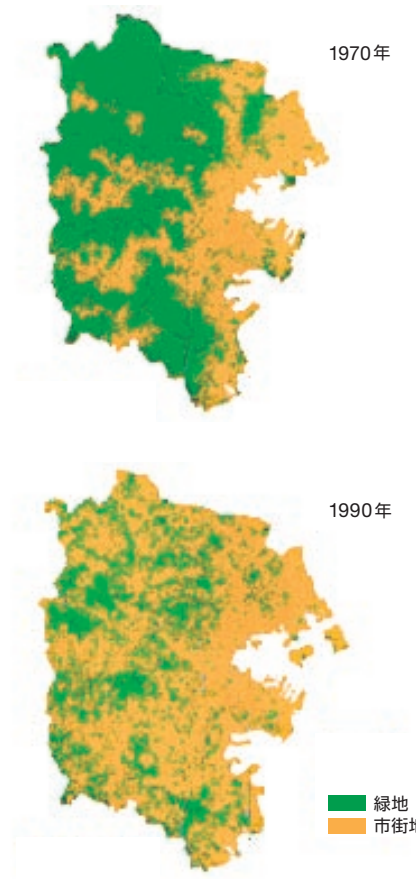
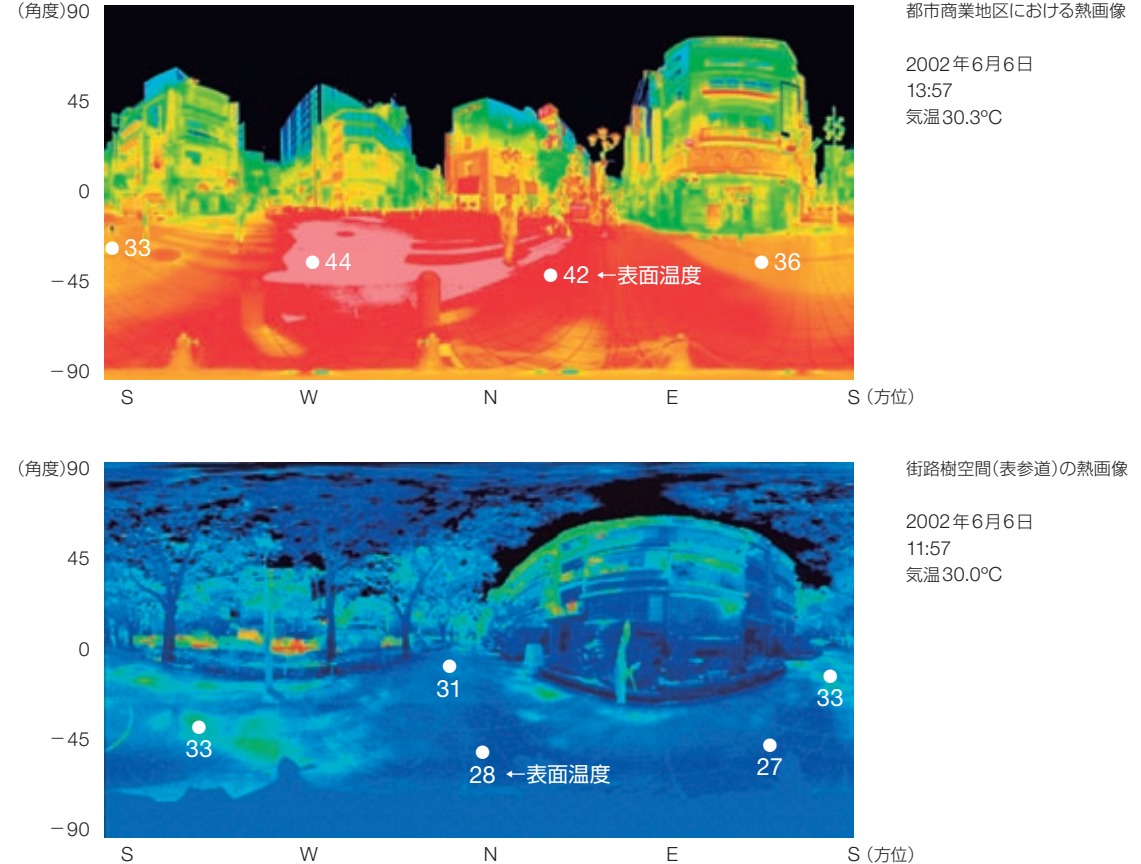


図4 東京都内の夏季の表面温度分布(魚眼レンズによる熱画像:東京工業大学梅干野研究室撮影)



っていることがわかります。

このように樹冠の大きな高木は、日射遮蔽を行って緑陰に周囲より気温の低い「クールスポット」を形成するとともに、樹冠自体の表面温度が気温程度であるため周囲への熱放射の影響も少ない優れた「空間構成要素」なのです。

ヒートアイランド対策を考慮した計画事例

東京都内の飯田町貨物駅跡地に開発されたアイガーデンエアでは、開発地区内に300mにも及ぶ高木の街路樹空間をはじめ各所に緑陰空間が形成されています。ここで緑による気温低減効果を実際に確認してみました。

2004年夏季に実測を行ったところ、街路樹空間以外の場所との比較では、夏季の表面温度は約10°C以上低下しており、日中を通じて地区内にて1~2°Cの気温低下効果を確認できました(図5,6)。当該地区内ではクールスポッ

トが形成され、都市の気温低下に貢献していることがわかります。

緑を生かした計画の普及に向けて

東京都大崎の再開発計画を対象として、屋外熱環境シミュレーションによるヒートアイランド緩和効果の検討を行いました。

敷地内人工地盤及び高層建物南側に集中的に緑化を行った計画モデル(緑地率約35%以上)では、東京都の平均緑地率相当の緑化である街路樹モデルに比べると、敷地内緑陰空間にて日中表面温度が約10°C以上低下しており、これに伴って約2°C以上の気温低下効果が予測されます(図7,8)。

さらにこのような計画を東京23区全域で実施した場合の効果を試算したところ、約40万kWh(8月晴天日の13時)もの消費電力量の削減に寄与可能であることがわかりました。

図5 アイガーデンエアの緑



図6 街路樹による緑陰空間の気温低下効果(2004年8月)

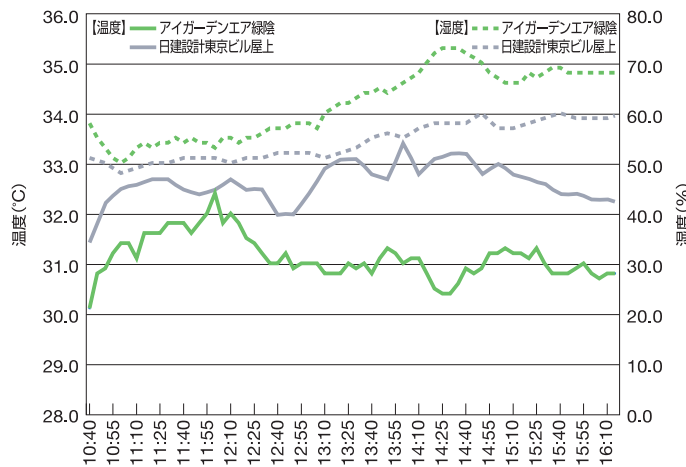


図7 再開発モデルケース平面図

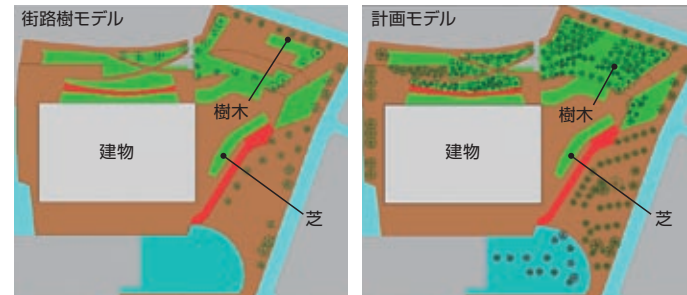
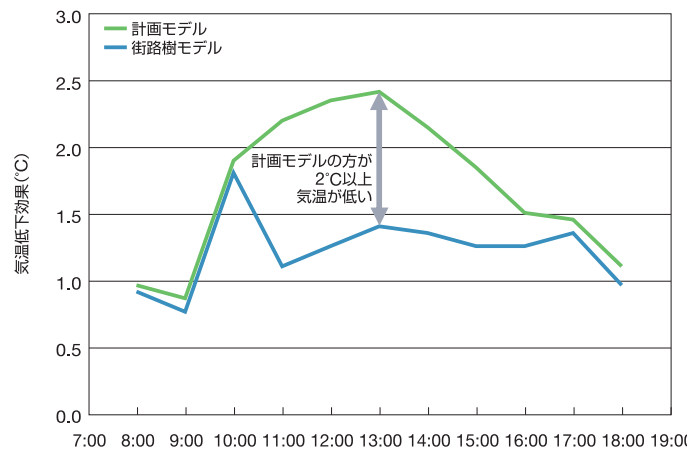


図8 緑化の相違による気温低下効果の比較



日建設計「都市経営フォーラム」ダイジェスト 大隈 哲(日建設計 都市・建築研究所)

第225回 2006年9月21日
蘇るか。いきいきとした農村景観

楠本侑司 (くすもと ゆうじ)
農村開発企画委員会専務理事

講師の楠本侑司氏は1943年中国上海生まれ。1969年~70年、日本工業大学建築学科助手。1971年~73年、東京工業大学工学部助手。1973年~現在、財団法人 農村開発企画委員会専務理事。

1945年には、国民の半分は農民だった。今、農民人口は12%。高度成長期以降、農村から大都市に出て行った人が、日本の近代化を支えてきたということだ。ヨーロッパは18世紀から20世紀初めに人口移動したのに比べ、いかに急激な都市化や近代化が行われたかが分かる。

農村景観とは

日本の農村景観は、風土に合わせた営農により造り出され、砺波平野の散居村、川に沿った集居村、整然と圃場が整備された村、クリーク(水路)に沿って集落のある村、条里制の村などさまざま。農村景観の要素は、「ノラ・ムラ・ヤマ」。これらを結びつけるのが、水システムである。

わが国の農地の状況

わが国の農地面積は、この30年間で、110万ha減少した。都市化時代には、農地転用で建築用敷地にする場合が多かったが、耕作放棄地の発生面積の方が多し。これは農業の担い手不足と農業者の高齢化が原因である。

日本の食料自給率は、40%程度。ヨーロッパは100%超。1999年の「食料・農業・農村基本法」で、日本の食料自給率を45%にしようと計画された。日本全国の農振農用地面積は現在409万ha、2015年には農振農用地面積は375万haになる。食料自給率を上げるためには、30万haの農地を政策的努力で確保する必要がある。

農村空間の変容

農村景観の変化に大きな力を持つのが、都市化と過疎化である。市街化調整地域開発の圧力が高速道路・幹線道路や工場の建設・沿道開発をもたらした。農地の横に文化住宅、丘陵地に集

都市経営フォーラムの全文は、ホームページに掲載されていますのでご覧ください。
http://www1k.mesh.ne.jp/toshikei/

合住宅が建ち、農地には野立看板が立った。

各地で耕作放棄地の増加により「限界集落」が発生しつつある。分散作圃という小さな農地で始まった日本の農業は、求めた圃場整備事業で大きな圃場に再整備され、直線の水路を造って安全対策のフェンスを立てた。これでは、農村景観が守られる筈がない。最近、ようやく、石積み水路、親水、ビオトープが見直されている。

農村景観選好

農村居住者と都市生活者による農村景観の選好を見ると、伝統的な水田農村イメージ、農地と集落の田園イメージ、農地と近代的建物のイメージ、整備の手の入っていないいわゆる田んぼイメージの4つの類型に分けられる。水田イメージ、田園イメージは高い評価だが、整備されない棚田のようなところは評価が低い。都市の人は昔の農村景観を好み、農村の人はコンクリート河川と圃場整備した田んぼと近代的住宅を好んだ。農作業の労力の大変さの証左でもある。

景観法による景観農振整備計画とは

景観法による景観農振整備計画は、岩手県一関市、山梨県甲州市(旧勝沼町)、滋賀県近江八幡市で取り組んでいる。田園遺構を生かし世界遺産を目指したり、ブドウ畑の景観を生かしたり、都市と周辺農村の景観を総合的に見ようとしている。計画の根底には、農地転用しない方向という希望がある。

農村での農的手法による住宅づくり

最近の農村での住宅づくりの話。福井県越前町では、農水省の農村活性化住環境整備事業を活用し、圃場整備と住宅を一緒に造った。圃場は農業土木流の真四角になったが、周辺の住宅地は緩やかな協定で屋根には本瓦、壁の色を規制、生垣を造り、地形に合わせた水路を持ち子どもが遊べる広い曲線道路と電線の地中化を実現した。

農村景観を豊かに保つには、堅実な営農環境をどう造るかである。

受賞から

最近の主な受賞をご紹介します。



パレスサイドビルディング
第6回日本建築家協会25年賞
(社)日本建築家協会



神戸栄光教会
平成18年度日事連建築賞
(社)日本建築士事務所協会連合会
優秀賞



青山学院大学 相模原キャンパス
第5回エコビルド賞
エコビルド実行委員会/(財)建築環境・省エネルギー機構
エコビルド大賞



中標津中学校
平成18年度日事連建築賞
(社)日本建築士事務所協会連合会
奨励賞
北海道日建設計

出展から

ドバイでの展示会に参加しました。

不動産業界の世界最大のイベント、シティスケープ・ドバイ2006が、2006年12月4日から6日までの3日間、UAEのドバイ国際エキシビション・センターで開催され、日建設計も出展しました。

今回は55カ国から500以上の出展者が集まり、90カ国から35,000人以上の来場者がありました。

日建設計は「Realize the Vision」をテーマに和をモチーフとし、「GREEN・ICONIC・HIGH-TECH・INTEGRATIVE」の4機軸からなる展示を行い、多くの方々にご来場いただきました。



竣工しました



対馬市交流センター

6町合併によって市となった対馬市に建設された商業店舗、イベントホール、図書館などからなる複合施設です。歴史的にアジアの玄関口である対馬のシンボル施設として建物全体がウエルカムゲートとなるよう計画しました。

建築主 今屋敷地区市街地再開発組合
 所在地 長崎県対馬市
 構造 鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造
 階数 地下1階、地上4階
 敷地面積 6,720.63m²
 延べ面積 19,977.77m²
 工期 2005年6月～2006年9月



東京女子医科大学付属 八千代医療センター

小児医療、救急医療の充実などを目的とした355床の地域中核病院です。京葉地区初の総合周産期母子医療センターを設置しています。診療科目や看護単位に固定されないフレキシブルなフリーアドレス制の外来を実現し、柔軟な運用と高効率化に対応しています。敷地内には安全で開放的な緑地空間を整備し、地域の人々も日頃から気軽に訪れることができる公園のような憩いの場の提供を心がけました。

建築主 学校法人 東京女子医科大学
 所在地 千葉県八千代市
 構造 鉄筋コンクリート造、免震構造
 階数 地上6階
 敷地面積 29,171.51m²
 延べ面積 42,105.78m²
 工期 2005年3月～2006年9月



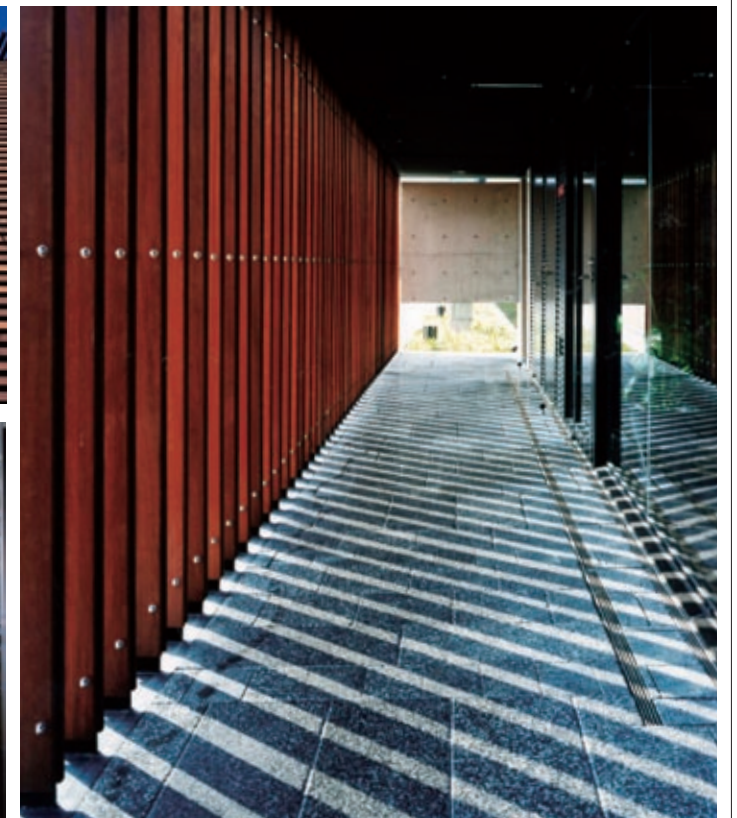
竣工しました



新菱冷熱工業株式会社 耕風寮

会社創立50周年記念事業として計画された研修寮です。省エネルギーに配慮した設備計画、壁面緑化、再生材を用いたランドスケープなど、積極的に環境配慮に取り組み、CASBEE(建築物総合環境性能評価システム)のSクラスを達成しました。

建築主 新菱冷熱工業株式会社
所在地 横浜市保土ヶ谷区
構造 鉄筋コンクリート造
階数 地上3階
敷地面積 3,457.71m²
延べ面積 3,707.29m²
工期 2005年8月～2006年4月



京都リサーチパーク8号館

成長期を迎えたベンチャー企業をターゲットとしたレンタルオフィスの計画です。メゾネット形式のユニットをオフィスの基本単位として、上下左右に連結していく構成です。共有スペースに「界限」的な雰囲気を持たせ、テナント相互のコミュニケーションが図られる計画としています。

建築主 株式会社アーバネックス
所在地 京都市下京区
構造 鉄骨造
階数 地上3階
敷地面積 38,417.86m²
延べ面積 1,588.87m²
工期 2006年3月～2006年9月



日建設計シビル	日建ハウジングシステム	北海道日建設計	日建設計総合研究所	日建スペースデザイン	日建ソイルリサーチ	日建設計 マネジメントソリューションズ	日建設計 コンストラクション・マネジメント	ブロードバンド・ エンジニアリング	ビルディング・パフォーマンス コンサルティング
---------	-------------	---------	-----------	------------	-----------	------------------------	--------------------------	----------------------	----------------------------

日建ハウジングシステム

株式会社 日建ハウジングシステム
 東京都新宿区下宮比町1番4号
 Tel: 03-3264-6609 Fax: 03-3264-6697
 URL: <http://www.nikken-hs.co.jp/>



配置

「ステイツグラン茨木」が
 (財)日本産業デザイン振興会
2006年度グッドデザイン賞(環境部門)を受賞
 大阪府茨木市中心部の、市役所、図書館、市民ホールなどに近接し、東側は緑地帯を形成する元茨木川緑地に接する恵まれた敷地に建つ集合住宅です。2003年度の事業コンペ当選を経て2006年3月に竣工しました。

中央を南北に貫通する小川と道路に沿って広幅員の歩道を整備し、元々東西に貫通していた耕地整理道路を緑道として生かすことにより、四街区のまちを創出したことが評価されました。それらの交差点には、土地の記憶にある桜をシンボルツリーとした「桜の辻広場」を配し、緑のネットワークの中心として位置づけました。提供公園を含めて約16,000m²の開発区域の空地率を65%まで高め、広大なオープンスペースを確保しています。



桜の辻広場



D街区外観

北海道日建設計

株式会社 北海道日建設計
 札幌市中央区大通西8丁目2番地
 Tel: 011-241-9537 Fax: 011-261-7673
 URL: <http://www.h-nikken.co.jp/>



外観



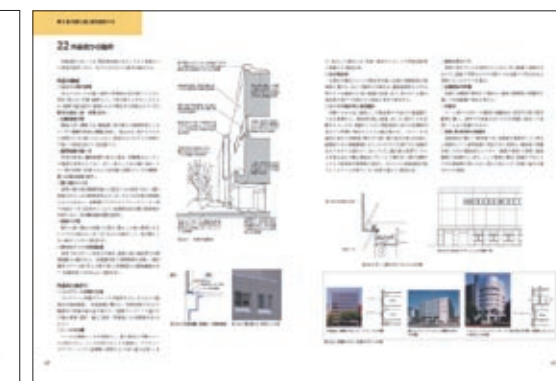
打ち合わせコーナー入口



打ち合わせコーナー全景



「北海道の建築」表紙



内容の一例

50周年を迎えて

当社は昨年5月に50周年を迎えました。大きな節目ではありますが、51年目のスタートであると考え、今後も益々顧客の皆様のご要望にお応えすべく、スタッフ一同努力していく所存です。

事務所の移転

51年目のスタートにあたり、昨年11月に住友商事・フカミヤ大通ビルに移転しました。移転先のビルは、7社による事業コンペが行われ、当社+住友商事グループが特定を受け、1989年に竣工した建物です。

移転に際しては、お客様と直に接する来客ゾーンの充実を図りました。入口は引き戸で、日中はオープンのままとし、入りやすさを第一に透明性を表しました。内部照明はゲート状に光らせて「いらっしゃいませ」の気持ちを表現しています。また、モノトーンでシンプルなデザインとし、当社に来ていただいた方々との打ち合わせが、快適に行えるよう計画しました。

「北海道の建築」の発行

私たちの先輩は、北の大地に根ざした設計事務所として1956年5月に北海道日建設計を設立しました。以来50年にわたり、積雪寒冷地という特異な条件の中で、顧客の皆様をはじめとする多くの方々との協働のもと、様々な経験を積み重ねてきました。

その中で育まれた、経験的デザイン技法を「設計技術ノート」として発行しました。本書は、北海道の気象条件から設計・監理にいたる全般と設計作品を紹介しています。今後ともよりよい北海道の建築を目指し、多くの知見が詰まっているこのノートを活用しながら、更なる飛躍をしていきたいと考えています。